

「アガデ (アツカード) の gur」について

中 原 与 茂 九 郎

(1)

故アントン・ダイメル教授は南部メソポタミアのファラ(古のシュルツパーク)やテルロー(古のラガシュ)から出土した、都市国家時代の初期から末期にかけての時期の経済文書から、穀物の容量すなわち量目を解明された。全教授の研究によると、都市国家時代の穀物などの量目の単位はグル gur とウル ul(シラ sila₃)とであった。ダイメル教授は

- (1) 1gur 1ul = 36 sila₃,
- (2) 1gur 2-ul = 72 sila₃,
- (3) 1gur-sag-gál= 144 sila₃,
- (4) 1gur-mah₃= 8ul = 288 sila₃,

の四種のグルが都市国家時代に使用されたことを明かにされた。(1 sila₃=0.842リットル)そしてシュルツパークでは(1)と(4)とが、ラガシュのウルガギナ時代には(2)と(3)とが使用されたことを明かにされた。

次にしばらくダイメル教授の考察のあとをたどって見よう。

ダイメル教授は「ファラ出土の経済文書」第三巻の第五五泥章の数字を取り挙げられた。この泥章は 37 ブル 9 イクの畑の大麦の種子の数量を記録した文書である。次のような数字が記録されている。

ODG } se gur-mah₃ 大きい貯蔵庫

DDD } se gur
DDD } ガムガムの貯蔵庫。
DDD } 大麦の種子。

合計 8D se gur-mah₃ とある。大麦の数量の記号を計算すれば、もし

$$D = GG = 4ul$$

とすれば D = 8ul となり合計 21gur-mah₃ と一致する。ダイメルは 1gur-mah₃ = 8ul の数値を得た。

次にダイメルは第65泥章の数字を取り挙げた。この泥章は6組に分類された6名の監督 ugula と 104名の労務者 dumu-dumu 合計110名の労務者 dumu-dumu に分配された大麦の配給表である。監督には各自に D つつ、労務者には各々 G D つつ、合計は ODDDDD } gur-mah₃ であった。

ダイメルは個々に与えられた大麦配給量を

$$6 \times \frac{1}{2} + 104 \times 2 \frac{2}{3}ul$$

$$= 3(gur-mah₃) + 277 \frac{1}{3}ul$$

と計算した。277 $\frac{1}{3}$ ul を gur-mah₃ に換算すれば 277 $\frac{1}{3}$ (ul) ÷ 8 (ul) = 34 $\frac{1}{2}$ gur-mah₃ と 1 $\frac{1}{3}$ ul になる。各人に分配された大麦の配給量は 3 + 34 $\frac{1}{2}$ gur-mah₃ と 1 $\frac{1}{3}$ ul となる。1 $\frac{1}{3}$ ul を gur-mah₃ (= 8ul) に換算すれば $\frac{1}{8} + \frac{1}{24}$ gur-mah₃ となる。

すなわち大麦の配給量は 37 + $\frac{1}{2} + \frac{1}{8} + \frac{1}{24}$

gur-mah であつた。これは泥章に記された合計と一致する。

第98泥章によれば82人の労働者 guruš が麦粉を 𐎠𐎠𐎠𐎠 づつ受取つてその合計が

$$\begin{array}{c} \text{O DDDD} \\ \text{O DDD} \end{array} = \text{𐎠𐎠𐎠𐎠}$$

と記されている。ダイメルは 𐎠𐎠𐎠𐎠 を 1 ul の gur と解釈している。 $\text{𐎠} = \frac{1}{3}$ ul とすれば $82 \times \frac{1}{3} = 27\frac{1}{3}$ ul となる。

「かくしてファラ・ナキストには

$$(1) \text{ 1gur 1ul} = 36 \text{ sila}_3$$

$$(4) \text{ 1gur-mah} = 288 \text{ sila}_3$$

が使用されている。この二つの gur は、ウルカギナのテキストには見出せない。gur-mah はアッカード王朝時代のテキストには時たま見出せる。ラガシュのウルカギナのテキストには

$$(2) \text{ 1gur 2-ul} = 72 \text{ sila}_3$$

$$(3) \text{ 1gur-sag-gál} \\ = 144 \text{ sila}_3 (= 4 \text{ ul})$$

が使用された。これら四つの gul はそれ自身純粹な六進法に属している。(2)は(1)の倍数、(3)は(2)の、(4)は(3)の倍数であり、(1)= 6^2 ; (2)= 2×6^2 ; (3)= 12^2 ; (4)= 2×12^2 である。」と結論してられる。

(2)












ところが一つの泥章の数字は、以上四つの gul では解けないことを指摘してられる。それは第99泥章の数字である。この泥章は麦粉の配給表である。泥章の表面には人数と人名とが記録されている。裏面には

$$79 \text{ guruš} / \text{ zi}_3\text{-ba} / \begin{array}{c} \text{𐎠𐎠𐎠} \\ \text{𐎠𐎠} \end{array} \text{ sila}_3 \\ \begin{array}{c} \text{𐎠𐎠𐎠} \\ \text{𐎠𐎠} \end{array} \text{ sila}_3, \text{ ti-su-ba}$$





と記録されている。ダイメル教授はこの表は、79人の労働者が麦粉5 sila₃づつ合計395 sila₃を受取つたように見える。それは $\begin{array}{c} \text{𐎠𐎠𐎠} \\ \text{𐎠𐎠} \end{array} \text{ sila}_3$ と書かれている。それ故にもし $\text{𐎠} = 60 \text{ sila}_3$ 、そして $\text{𐎠𐎠} = 30 \text{ sila}_3$ とすれば 1gur-mah は $8(\text{ul}) \times 60 = 480 \text{ sila}_3$ となる。この計算は上記の数字と一致しない。No. 99の意味は不確定であり、暫時決定しかねると述べてられる。




No. 99泥章は次のようにすれば解明出来るのではなからうか。それはダイメル教授が指定されているように $\text{𐎠} = 60 \text{ sila}_3$ 、 $\text{𐎠𐎠} = 30 \text{ sila}_3$ とすればよい。 $60 \times 6 + 30 + 5 = 395 \text{ sila}_3$ となつて 5 sila₃ $\times 79 = 395 \text{ sila}_3$ と一致する。ダイメル教授がつきあたられた壁は二つあると推察される。その一つはシュルツパークで使用された gur は 36 sila₃ と 288 sila₃ との二種類しかなかったと考えられたこと。第二はシュルツパークの経済文書はウルカギナ時代より遙かに古い文書と考へていたことであつたと筆者には思われる。ダイメル教授の Fara III の経済文書集は大部分が翻字で一少部分が手写され、4個が写真版として出版されている。手写版および写真版で見ると、それらの書体はウルカギナ王時代からアッカード王朝期のものに近いように思われる。古い時期のシュルツパーク独特の書体とは異つてゐる。数字の記号をその性質によつて書き別け

る方法は古くから見られるが、都市国家末期以後はことにしばしば見られる。No. 99には gur の文字は書かれていない。筆者はこの泥章はアッカド時代のものかと思う。而して gur A-ga-de^{ki}「アッカドのグル」は、ダイメル教授がそのシュメール語辞典 (S.L. No. 111, 2)) で 240 sila₃ の容量とされているのを 300 sila₃ の容量に訂正したい。



次に「アッカドのグル」が 300 sila₃ の容量であったことの根拠をラガシュ出土の泥章で検討して見たい。それは RTC〔186〕号泥章である。表面 2 行目に  sila₃ ga-har A-ga-de^{ki}, 5 行目に  sila₃ ga-har, 8 行目に  sila₃ ga-har, 11 行目に  sila₃ ga-har, 裏面 4 行目に šu-nigin  sila₃ ga-har gur A-ga-de^{ki} とある。gur A-ga-de^{ki} = 300 sila₃ として  = 60 sila₃ とすれば  = 60 × $\frac{5}{6}$ = 50 sila₃,  = 60 × $\frac{4}{6}$ = 40 sila₃,  = 60 × $\frac{3}{6}$ = 30 sila₃,  = 60 × $\frac{2}{6}$ = 20 sila₃,  = 60 × $\frac{1}{6}$ = 10 sila₃ となる。

RTC〔185〕のチーズ ga-har の量目を合算すれば

$$\left. \begin{array}{l} 4 \text{  } = 4 \times 60 = 240 \text{ sila}_3 \\ 2 \text{  } = 2 \times 40 = 80 \text{ } \\ 1 \text{  } = \dots\dots\dots 30 \text{ } \\ 1 \text{  } = \dots\dots\dots 20 \text{ } \end{array} \right\} 370 \text{ sila}_3$$









合計 šu-nigin の  = 300 sila₃,  = 60 sila₃,  = 10 sila₃ は 370 sila₃




となり、泥章に記録された各個の合算と合計とは一致する。なお楔形で書かれた sila₃ の数字は合算すれば $6\frac{1}{2}$ sila₃ となるが、泥章に記された合計は $5\frac{1}{2}$ sila₃ と書かれ 1 sila₃ の誤差が生じているが、これは恐らく書記の誤記と思われる。

Fara III の No. 99 が 6 × 60 = 360 sila₃ をラガシュ風に  と書くのが常態であるのが、何かの都合で  を 6 個書いている。どちらにしても両者とも容量は同じである。

ここに注目すべきことはアッカド時代になって量目に 6 進法と 10 進法とが結合されたことである。

ウル第三王朝 (2065~1955 B.C.) まではダイメル教授も指摘された如く、時たま gur-mah も使用され、ラガシュでは明かに gur-sag-gál と gur A-ga-de^{ki} とが併用されていた。

RTC〔201〕泥章の如きは一つの泥章に兩種の gur が併記されている。すなわち表面 1 行目には      še gur-sag-gál = 600 + 60 × 4 + 40 + 1 + $\frac{2}{4}$ = 851 gur-sag-gál 72 sila₃ と記され、以下 gur-sag-gál の量目がつづき、裏面 6 行目には    še gur-A-ga-de^{ki} と記録されている。

近年 (1952) クレーマー教授によって発見紹介されたウル第三王朝の創始者ウル・ナムの法典の前文に「公正な度量衡を制定した」と記録されている。一般的には楔形で  = 300 sila₃,  = 60 sila₃,  = 50 sila₃

𒌷 = 40 sila₃, 𒌸 = 30 sila₃, 𒌹 = 20 sila₃, 𒌺 = 10 sila₃ の容量をもつ「王のグル」gur-lugal は従来は二代王シュルギの制定したものと考えられてきたが、ウル・ナム法典の前文の記録から見れば、ウル・ナムの時に制定されたとも考えられる。それはともかくウル第三王朝時代の実証記録の量目の数字は gur-lugal に統一されている。而してその容量はウル王が新しく制定したものでなく、アッカド王朝(2350~2150B.

C.) の gur A-ga-de^{ki} を踏襲したものであると見ねばならない。アッカド王朝時代には「アッカドのグル」の外に地方地方によって都市国家時代(5000~2350B.C.)に使用されていた量目も併用されていた。しかるにウル第三王朝の君主が地方的量目を廢止して gur-lugal に一本化したことはウル第三王朝の集権的統一政策の一つの具体的な表現と解されるであろう。

-1960.11.-

いわゆるラガシュ文書の一、二の問題点について

山 本 茂

筆者はさきに、ラガシュ古王国のウルカギナ時代の社会組織について、少しく検討してみた。^(註)ところが、その際、紙数の都合もあって、社会史的検討を行なった経済文書そのものが、そのような検討の基礎として、果たして信頼しうるものか、どうかについては、ほとんど触れないうちに終わった。そこで、本稿では、この問題について感じたことを、一、二、書きとめておきたいと思う。

(1) 文書の合理性について

まず第一に、細部にわたって分析するには、此の4500年以前のタブレットの記載が、今日の我々から見ても理解できる合理性をもっていることが前提となる。ところが、経済文書のなかには、かなり理解に苦しむタブレットも少くない。筆者がこれまで社会史的検討の手がかり

りとしてきた、ラガシュのバウ神殿の大麥給付表(šē-ba)は、シュメール経済文書のなかでは、最も形式も整い、かつ規模も大きく、純粹の会計記録として、理解しやすく、詳細な人名・職名による分析に耐えうるものである。しかし、このšē-ba表のなかにも、難解な部分がある。特にラガシュ国の支配者の子供達の支配下にある人々に対する大麥給付表、šē-ba lu₂ TUR·TUR-la-ne' は難解である。なかには、一見したところ、合理的な解釈を許さないように見える箇所さえある。しかし、一見非合理的にみえても、仔細に検討してみれば、シュメール人書記のとった、独自の省略的記載法の根拠も理解できなくはない。問題は、我々にとって難解であるに過ぎぬのか、あるいは文書の記載自体に法則性がないのかにある。した